

地図と私



淡路ワールドパークONOKORO
兼高かおる旅の資料館名誉館長
兼高かおる

地図が読める！

地図ときくと世界地図が頭に浮かぶ。テレビ番組「兼高かおる世界の旅」の海外取材31年間、世界地図をパートナーとして仕事をしてきたのだから私にとっては当然である。今でも世界地図を見ていると地図が話しかけてきてくれる。あの空、あの海、山、石の遺跡等々といつの間にか雑念は消え、集中力と想像の世界が広がり時の過ぎるのを忘れるのである。私の心を自由の世界にとびまわらしてくれる至福の時かも知れない。

「地図と私」を語りだしたらきりがない。まずはオキュパイド・ジャパンの頃、米軍将校の通訳で田舎の小さな土道を地図を見ながら走り、鉄道の踏切を越え、この後は四辻を左へなどと言った時、彼は驚きの表情でどうしてそんなに地図が読めるのかと聞いたことがあった。私にとって当たり前のことだったので何故彼が驚いたか不思議だった。その前に車修理所の前で酸素溶接と書いてあったのを私は酸素の英語が思い出せず、H₂OのOでウェルドすると通訳し、私はうまく言えたと内心得意だったのに、彼はそうか、と言つただけで驚きもしなかったのに……。あの頃の私はまだ疑ることを知らない清らかにしてナイーヴな乙女であった故もあるが地図を全く信じていたし、ありがたいことに日本の地図は正確だった。地図を読むことなど小学校を出ていれば誰でもできると思っていたが、モロッコでついた英仏西語堪能の青年ガイドに地図を示し、私たちの現在位置はどこかといたら彼は憤然として「私はエンジニアではない！」と言い返してきたから、やはり地

図を読めるというのは“大した者”なのかもしれない。

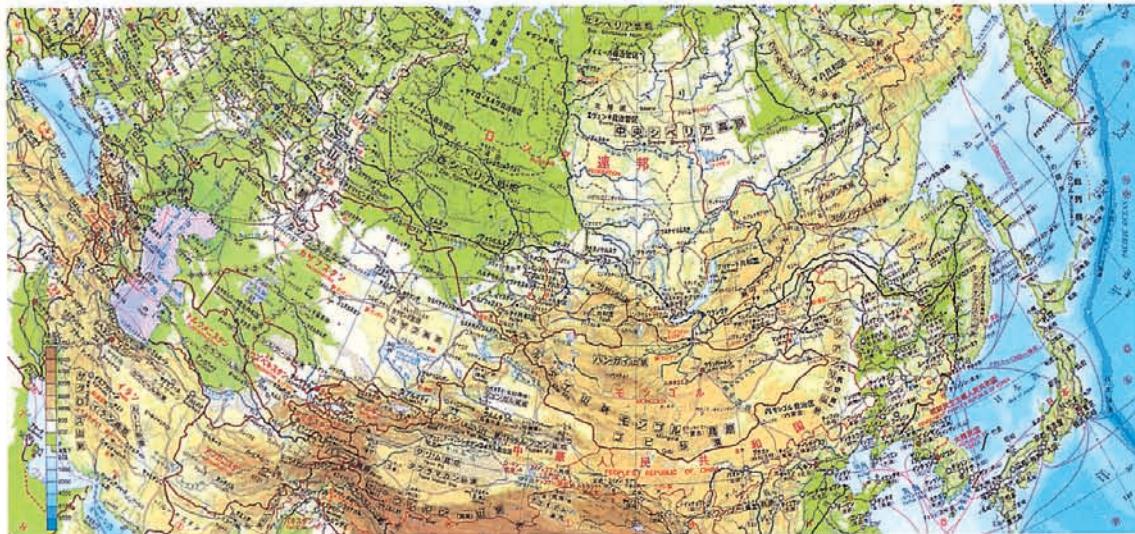
地名が変わる

長年、地図に携わっていると地理地形は変わらなくとも政治体制で国境も名も変わってくるのでいつまでも以前の知識にとどまってはいられない。落語で耳の遠いご隠居さんが「あそこをいくのは丸兵衛さんかい」と婆様にいうと「違いますよ、丸兵衛さんですよ」隠居「そうかい、私は丸兵衛かと思ったよ」という会話があるが、変更した名のビフォーとアフターを知らない同志の会話も似ている。彼「ビシュケクは木の多い町ですね」私「は？」彼「兼高さんは行ったことないですか」私「フルンゼも並木が何重にもなっていて木の多い町です」彼「フルンゼってどの辺？」何のことではない、キルギス共和国の都フルンゼの名がビシュケクに変更したのである。フルンゼならロシア革命のヒーローという理由ある名なので覚えやすかったのに。日本国内の歴史のある地名もやたらに便利主義でかえてもらいたくない。

ソヴィエトが消滅してから共産圏のどこにでもあったスターリン、レーニンの名が消えていったが、ソヴィエトの権力下であっても東欧はソ連をからかうアネクドゥト（小話）がよく語られていた。その一つに「今後、我が偉大なる英雄の名を地名にするのはやめる。何故なら党の評価が変わるたびに地名表記を作りかえるのは我が国の経済をおびやかすからである」。私としても地名が変わるとたびに新しい地図を買っていると我が経済がおびやかされる。

地名の読み方が変わる

名は変わらないが読み方が変わるもの異邦人にとって問題である。ペキン、ペイピン、ペイチン、ペイジンは漢字なら北京だから中国人と話す時は日本人は漢字を書けばわかってもらえる。しかし中国は漢字も変えてきたので旧漢字を使う私たち



帝国書院地図帳より

にはわからない所も出てきた。私は英語の地図を使うが日本語読みと違うので、ある程度はカンと緯度で私の知っている都市名と照らし合わせてみるのである。ウーハン、私は5倍と思ったら武漢、チョンチン？ チョントゥー？ が重慶、成都であったのは古い日本の地図で長江をさかのぼって漢字を見つけて判明した。以前からチントオ、マカオ、シャンハイと呼び名通りに教えられていた所は苦労がない。こまかい発音はともかく、今後は中国、韓国の地名は現地読みで書いてくれると次世代には便利ではないか。地図の話を異国語人と話す時に固有名詞が通じあわないと話が進まない。地図、地名を話題にする人たちは教養あるクラスである。現実的に言ってこういう人たちは英語を大方理解するから現地読み、または英語読みで地名を記入してみると、より多くの人たちと相互理解しやすくなると思う。

次の問題は発音で、Dをジとするのはやめてもらいたい。サン ジエゴ？ ジュッセルドルフ？ ジージヨン？ ブルゴーニュ・ワインの都、ディジョンがジージヨンでは味も変化してしまいそうだ。加えてお願いしたいのはせめて地図だけでもしとRの特別文字、記号を導入してくれるとありがたい。ラ行文字を用いる名は多い。近隣諸国でもコリア、フィリピン、ラオス、マレーシア、現在世界の問題地域のイスラエル、イラク、レバノン、ヨルダン、イラン、カタール、アラブ首長国

等々。国際化社会に生きる次世代にしとRの使いわけをすんなりと身につけておくのは必要である。

公共の場には「世界地図」を

「国際化」といえば政府もメディアも盛んに強調しているが国内に世界地図が意外に普及していないのは驚きだ。私の講演は必ず大きな世界地図を会場の方々に見られるようにはり出してもらい、世界の国々をさしながら話すのだが、市町村の役場、学校にもないので……と言われることが多い。あっても巨大なソ連がある古い地図だったりする。世界地図が公共の場にはり出してあれば世界情勢がもっとわかりやすくなるのに、思わずにはいられない。是非とも普及に力を入れてもらいたいものである。

プロフィール

1928年神戸市生まれ。ロスアンジェルス市立大学留学後、「ジャパン・タイムズ」などのフリーランサーとして活躍。1958年、スカンジナビア航空主催の世界早回りで73時間9分35秒の新記録を樹立。1959～90年、テレビ番組「兼高かおる世界の旅」(TBS系)をナレーター、ディレクター兼プロデューサーとして製作。取材国は約150か国、地球を約180周、1年の半分を海外取材に費やした。現在、横浜人形の家館長、日本旅行作家協会副会長などをつとめる。

著書「私の愛する懇いの地」「私の好きな世界の街」(新潮社)他多数。